

# 李白と九華山の「詩跡」化について

寺尾 剛

## 一、序々李白の九華山詩二首

九華山は、安徽省南部青陽県西南に位置する連峰（主峰の十王峰は一三四二米）で、いわゆる景勝の地「皖南」を代表する名山として、そしてまた、現在では中国四大仏教名山の一つとして、その名は広く内外に知られている。しかしながら、この山は、唐代の前半に至るまでは、一応「九子山」という名称はあったものの、僻遠の地に位置していたこともあって、ほとんど全く話題にされることはなかった。文学史上、この山を天下に知らしめ、後世、多くの詞人黒客をして「詩跡」として注目させた最大の「功労者」は、李白（七〇一―七六二）と、それに継ぐ劉禹錫（七七二―八四二）であろうと考えられる。ちなみに李白はこの「九華山」の命名者でもある（これに対する異論については後述）。本稿では、「詩跡」研究の一環として、「詩跡」の発生・継承・定着の過程を、李白と九華山との関わりを中心に検討していくことにしたい。はじめに、問題となる李白の九華山関係の作品二首を挙げておく（底本は『王琦本』）。ちなみにこの二作品の制作年代については、現時点では天宝十三載（七五四年、李白五四歳）ないし十四載とする説が有力である。

改九子山為九華山、聯句 并序〔九子山を改め九華山と為す、聯句 序を并す〕

青陽嶽南、有九子山。山高數千丈、上有九峰、如蓮華。案圖徵名、無所依拠。太史公南遊、略而不書。事絶古老之口、復闕名賢之紀。雖靈仙往復、而賦詠罕聞。余乃削其旧号、加以九華之目。時訪道江漢、憩於夏侯迴之堂。開簷岸幘、坐眺松雪、因与二三子聯句、伝之將來。

〔青陽嶽の南に、九子山有り。山高數千丈、上に九峰有り、蓮華の如し。図を案じて名を徵するに、依拠する所無し。太史公南遊せしも、略して書せず。事、古老の口に絶え、復た名賢の紀を闕く。靈仙往復すと雖も、而るに賦詠聞くこと罕なり。余、乃ち其の旧号を削り、加ふるに九華の目を以てす。時に道を江漢に訪ひ、夏侯迴の堂に憩ふ。簷を開き幘を岸はし、坐して松雪を眺め、因って二三子と聯句し、之を將來に伝へん。〕

妙有分二氣

靈山開九華 (李白)

層標過遲日

半壁明朝霞 (高齋)

積雪曜陰壑

飛流歛陽崖 (韋權輿)

青燐玉樹色

縹緲羽人家 (李白)

妙有 二氣を分かち

靈山 九華を開く (李白)

層標 遲日を過め

半壁 朝霞 明らかなり (高齋)

積雪 陰壑に曜き

飛流 陽崖に歛く (韋權輿)

青燐 玉樹の色

縹緲たり羽人の家 (李白)

【通訳】

「九子山を改名して九華山とする 聯句 序をあわせる」

〔序〕青陽県の南に「九子山」という山がある。高さ数千丈で、上に九つの峰があり、あたかも蓮華のようである。地図を見て名を調べようにも、依拠するものがない。太史公司馬遷は、南にも遊びに来ているのに、この山については、省略して記録しなかつたようである。この山のこととは、地元の人々の口承にも絶え、また、先賢たちの紀行文にも欠けて無い。多くの神仙が往復したであろうに、詩や歌にもほとんど聞かれない。私はそこで、この山の元の名前を削って、新たに「九華」の名称を与えようと思う。時に、私は江漢一帯を旅して回り、夏侯迥の屋敷でひと休みしている。軒端を開き、頭巾を脱ぐ。座りながら松にかかる雪を眺め、そして三三人の友人と聯句を作り、これを未来に伝えようと思う。

造化の妙は、陰陽の二気を分かち

この靈山に九つの華を開かせた (李白)

重なる峰々は春の日を留め

岩壁の半ばは朝霞で明るくなっている (高齋)

積もった雪は、暗がりの谷間を輝かし

飛び散る滝の流れは、日に照らされた崖に吹き出している (韋権輿)

青く光る玉石のような木々

はるかに見える神仙の家 (李白)

望九華山贈青陽韋仲堪〔九華山を望み青陽の韋仲堪に贈る〕

昔在九江上

昔 九江の上に在り

遙望九華峰

遙かに九華の峰を望む

天河挂綠水

天河 緑水を掛け

秀出九芙蓉

秀出す 九芙蓉

我欲一揮手

我 一たび手を揮なはんと欲す

誰人可相從

誰人か相ひ從ふべき

君為東道主

君は東道の主為り

於此臥雲松

此に於いて雲松に臥せん

【通訳】

〔九華山を望み、青陽県令の韋仲堪に贈る〕

かつては九流する長江のほとりから

この九華山を遙かに望みやつたこともある

銀河が緑水の瀑布となつて崖にかかり

そこに九つの芙蓉のごとき峰々がすばらしく抜きん出ている

私は、手を振つて、俗世にさよならしようと思つたが

いったい誰が付き従ってくれよう

東道の主たる韋仲堪君が案内役になってくれるというから

私はこの山で雲と松の間に寝っころがるでしょう

## 二、「九華山」の名称の定着時期について

もともと「九子山」と呼ばれていたといわれるこの山が、いつごろから「九華山」として承認されるようになったのであろうか。まず、公的な承認を得、正式名称となった時期を確認してみると、北宋・太宗太平興国八年（九八三年）成立の『太平御覽』卷四六「地部十一」に「九華山」の条が設けられており（内容については後述）、また、ほぼ同時期の北宋・太宗雍熙四年（九八七年）ごろ成立の『太平寰宇記』卷一〇五「九華山」の条に、「在〔青陽〕県二十里、旧名九子山。李白以九峯有如蓮花削成、改爲九華山。因有詩云、天河溢緑水、秀出九芙蓉。今、山有李白書堂基址存焉。…又按顧野王『輿地志』云、其山面有峯千仞壁立、周回二百里、高一千丈、出碧鷄之類。」とあるのが、現存の公的史料（両書ともに皇帝に上梓されたもの。特に『太平御覽』は奉勅撰である）としては最も古い。以後、北宋・仁宗元豊三年（一〇八〇年）成立の『元豊九域志』卷六「池州・池陽郡・青陽県」の条にも「有九華山、青山、五溪。」とあり、また、南宋に至っては『方輿勝覽』卷一六、『輿地紀勝』卷二二に、いずれも「九華山」の条が設けられている。特に『方輿勝覽』では「旧名九子山。李白以有峯有如蓮花、改爲九華山。」と、『太平寰宇記』の文をほぼ踏襲して、命名者を李白とする説を追認している。以後、歴代の地志も、「九華山」を正式名称とし、かつ、その命名者として、李白の名を挙げるのが常となっている。

では、唐代まではどうであったか。まず地志類に関しては、その多くは、すでに散逸してしまっており、確証は持てな

いが、現存資料を見る限りにおいては、「九華山」の名は見えない。例えば、唐・元和八年（八一三年）成立の『元和郡県志』「青陽県」の条を見ても、「九華山」に関する記述は一切なく、従って、この時点においては、なお「九華山」は、名称云々以前に、公的には注目に値しない山とみなされていたと考えるのが穏当であろう。ただ、前掲『太平御覽』「九華山」の条に「顧野王『輿地記』曰、九華山、山高一千丈。」という記述が見える。顧野王の『輿地記』（あるいは『輿地志』）一〇巻は、南朝・陳の太建二年（五七〇年）に成立したとされる一大地理書である（現在ではそのほとんどが散佚）。従って、この『太平御覽』の記述が事実であるとすれば、李白よりはるか以前に、すでに「九華山」の名称が存在したことになり、大問題となるところである。だが、やはり、この「九華山」の語は、原書ではその旧名「九子山」が用いられていて、『太平御覽』の編者が名称上の混乱を避けるために書き替えたもの、とみなすのが穏当と考えられる。と言うのも、徳森編『民国丁丑重新編訂』九華山志（一九三七年編）には、明末の曹学佺『名山志』の記述「顧野王『輿地志』曰、九子山、千仞壁立、周回二百里、高一千丈、出碧雞、五釵松。」を引用している。つまり、これによれば、顧野王の原書では「九子山」となっていたと考えられる。いずれにせよ、顧野王の書に記述がある以上、全く存在の知られていない山ではなかったようである（ただ、この青陽の「九子山」を言っているのか、また、他所のそれを言っているのかについては、地理説明がないので確定できない）。

以上のように、「九華山」の名称の国家レベルの公認、という意味では、北宋初期にまでしか遡れない、というのが現状である。しかし、文学レベルにおける承認は、極めて急速に行なわれたものと考えられる。その大きな流れとして挙げられるのが、中唐の費冠卿から、晩唐の李群玉・羅隱・杜荀鶴（いずれも晩唐を代表する詩人）、さらには、いわゆる「咸通十哲」（あるいは「芳林十哲」）に数えられる詩人たちに至る一連の動向である。まず費冠卿（生没年未詳、元和二年（八〇七年）進士）であるが、彼は母の死を契機に九華山に隠遁し、長慶元年（八二一年）に中央から右拾遺として召されたが、断ったという、いわゆる微士である（『唐摭言』巻八、『唐詩紀事』巻六〇等に伝がある）。彼の九華山に対する最大

の功績の一つは、「九華山化城寺記」（元和八年（八一三年）の作。『全唐文』卷六九四）の一文である。この文の意義は、彼が、九華山仏教の事実上の開祖とも言うべき金地藏（本名は金喬覺。もと朝鮮半島の新羅の王子・金氏の近族で、この九華山の洞窟で修業を続けた。至徳年間の初め（七五六年）、諸葛節郎がその苦行に感動し、土地を買い道場として献じ、それが化城寺の前身という。『唐詩紀事』卷七三に、短いが彼の伝がある）を広く世に紹介したことにあろう。むろん進士合格者である以上、詩においても優れていたと想像され、『全唐詩』には十一首の作品が挙げられている（大半は九華山隱棲中の作）。ちなみに、「九華山化城寺記」というタイトルに注目したい。李白の死後、わずか五十年にして、すでにこの山の名は「九華山」と呼ばれているわけである。この文の中では、李白の名は全く見られないが、その冒頭に「九華山、古号九子山。」と、あたかも、最近になって意図的・人為的に山名が改変されたことを暗示するような表現がある（一般に、複数の呼称が存在するならば、「別名……」等と表現されてしかるべきである）。李白の名を出さなかったのは、その必要性を感じなかったからか、あるいは李白が道教信者であったために、あえて避けたものか、一考を要するところである。この問題を考える上で重要な作品が、劉禹錫りゅうしやくの「九華山歌」であるが（「九華山」を取り上げたものとして、年代が確定できるものの中で、李白・費冠卿に続いて、三番目に古い作）、この作品は、九華山「詩跡」化の問題を考える上で、李白の作品とともに極めて重要であると考えられるので、次節以下に詳述することにした。

さて、この費冠卿は、金地藏の紹介者として、そして、この九華山を愛し終生ここに隱棲した文人として、後の唐詩人たちに大きな影響を残している。彼の生前にも、友人でもある姚合やうが（賈島と詩名を等しくした詩壇の重鎮。七七五？～八五五？）に「寄九華費冠卿」（『全唐詩』卷四九七）という作があり、死後においても、李群玉（姚合とも交遊。八〇八？～八六二）に「経費拾遺所居、呈封員外」（『全唐詩』卷五六九）、羅隱（八三三～九一〇）に「九華山費徴君所居」（『全唐詩』卷六五七）、杜荀鶴（九華山に隱棲し自ら九華山人とも号していた。八四六～九〇四）に「経九華費徴君墓」（『全唐詩』卷六九一）があり、いずれも九華山の費冠卿の旧宅や墓所を訪れて、彼の霊を弔っている。九華山が生活拠点であっ

た杜荀鶴は別にしても、李群玉や羅隱といった名立たる詩人たちが、この九華山に立ち寄っていること自体、文学史上、特筆するに値する。また、詩的名所「詩跡」という観点からしても、すでに晩唐期において、九華山中の費冠卿の旧宅及び墓所は、その地位を獲得していると言えよう。

さらに、この九華山人杜荀鶴とともに、若い時期、九華山において共に勉学に励んだとされる人物として、顧雲（？）八九四？）、殷文圭（生没年未詳）がいる（詳しくは傳璇琮主編『唐才子伝校箋』第四冊「殷文圭」の条を参照。『唐詩紀事』巻六七及び六八に両者の伝がある）。いずれも当時の詩壇に名を知られた人物である。また、咸通十二年（八七一年）の進士科の試験において、「九華の人」（おそらく「出身」ということでなく、ここで隠棲ないし学んだ人物という意）の張喬（生没年未詳）・許棠（八二二—？）・張蠙（生没年未詳）・周繇（生没年未詳）ら四人がまとめて合格し、時に「九華四俊」と号されたという記述もある（『登科記考』巻二三参照。なお周繇以外の三人については『唐詩紀事』に伝がある）。この四者は、いずれも当時のいわゆる「咸通十哲」に加えられており、当時としては著名な文学者であった。

以上のごとく、九華山は、晩唐期に至って、多くの文学者を輩出する南方の知識人集団のメッカとなっていたことがわかる（このほか江西省の廬山もそのような状況にあった）。そもそも、長江以南の地は、南朝人によって、はじめて文学的な開発がなされ、南北統一以後、北方の文学者たちにも、次第に注目されるようになり、さらには唐中葉の安史の乱に至って、大量の疎開者とともに多くの文学者が流入した。その時点で、九華山が、当時の文学者に発見されるのは時間の問題であったであろう。しかし、実際には、李白が九華山を紹介した以外、しばらくの間、ほとんど文学的には注目されなかった。李白の死後約六十年を経て、長慶四年（八二四年）、この付近に立ち寄った劉禹錫が「九華山歌」を作り（この作品は彼の代表作の一つでもある）、またこれと相前後して、実際にその山に棲んでいた費冠卿が、内側からこの山を讚え、さらには仏教的な意義を添えた。晩唐に至って、仏教の興隆と北方の政情の不安定さとがあいまって、九華山は大量の入居者を受け入れることになり（特に黄巢の乱〔八七五—八八四〕以後、とりわけ顕著となる）、同時にこれらの文



人たちの作品を通して、名山としての名声を得、そして「九子山」ではなく「九華山」という名称も確たるものとなっていったものと思われる。

ここで、あらためて李白に戻りたい。「九華山」という名称は李白にはじまる（同時に、この山に着目した、ほぼ最初の文学者）、という考えは、すでに見てきたように、北宋以降においては、ほぼ常識となっている。確かに、管見の限り、「九華山」の名称は李白以前には遡れない（『太平御覧』所引の顧野王『輿地記』に「九華山」とあるのは編者による改変であろうことはすでに述べた）。また、李白自身が「九子山を改め九華山と為す」と宣言している以上、彼の言葉を信じる限り、それを事実と考えざるを得ない。しかし、一応、この点を疑ってみる必要もあろう。というのも、李白には虚言癖があるという風評もさることながら、次のようなくつかの疑問が残るからである。

第一に、地名の改変が、当時から名を天下に知られていた詩人とは言え、一介の詩人の言によって容易に成し遂げられるものであろうか、という疑問。

第二に、その名称の定着の速度と浸透度。費冠卿、劉禹錫は李白以後、約半世紀にして、「九華山」という名称を採用している。この半世紀という時間を長いと見るか短いと見るかは主観的な問題であるにせよ、晩唐の詩人たちの用例を見た場合、古名が「九子山」であったという指摘が詩文中に見られることはあっても、詩題には、ほとんど「九華山」の名称が用いられている。その徹底した浸透度を考えた場合、あるいは、すでに李白以前からこの名称もあったのではないか、という疑問が残る。

そして、第三に、宋代以降においては、九華山関係の詩文の中に命名者として李白の名が多々見られるのに対し、唐代のそれには、管見による限り、ほとんど李白の名は出て来ない。例外としては、『太平御覧』（前掲）に『九華山録』曰、此山奇秀、高出雲表、峰巒異状、其数有九、故号九子山焉。李白、因遊江漢、觀其山秀異、遂更号曰九華。」とあり（作者名は記されていない）、『太平御覧』が採用する記述は、たいてい唐までのものであるので、この「九華山録」なるものも

唐代の作と、一応推定される（前掲『九華山志』はこれを唐の作者不詳の作としている）。また、南宋成立の『輿地紀勝』卷二二「九華山詩」の条の中に杜牧（八〇三―八五二）の作として七言律詩一首が紹介されており（詩題は記されていない）、その尾聯に「却憶謫仙才格俊、解吟秀出九芙蓉」とある（この作品は前掲『九華山志』等には、「郡樓望九華」と題され、その後半四句のみが掲載されている）。李白を意味する「謫仙」の語と、李白の前掲「望九華山贈青陽韋仲堪」の「秀出九芙蓉」の句がそのまま用いられていることなど、この作品が李白を踏まえていること、一目瞭然である。しかし、この作品、杜牧の別集類には掲載されておらず、杜牧の作品と断定することは難しい。ただ、杜牧は池州刺史時代、李白を踏まえた作品を多々残しており、またこの作品を掲載している『輿地紀勝』自体、南宋期というかなり古い時代のものであるので、この作品が杜牧のものでないと断言することも危険ではある。

唯一、貴重な資料となるのが、この杜牧とも親交のあった孟遲（生没年未詳。文宗開成三年（八三八年）に宣城に遊び、杜牧と唱和、武宗会昌五年（八四五年）、進士に登第している）の「發蕙風館、遇陰、不見九華山、有作」（『全唐詩』卷五五七）で、これには「我來淮陰城、千江萬山無不經。山青水碧千萬丈、奇峰急派何縱橫。又聞九華山、山頂連青冥。太白有逸韻、使我西南行。……」とあり、李白が九華山を歌ったことを明記している。ただ、李白が命名者であることについては言及していない。

しかし、唐代の九華山に関わる詩文において、以上の若干の例を除いて、李白の名がほとんど見られないという事実がある以上、それが偶然であったか否かは別にせよ、当然、果たして本当に李白が九華山の命名者なのか、また、そうだとしても、それを一般の詩人たちが知っていたのか、という疑問に突き当たる。

例えば、瞿蛻園箋証『劉禹錫箋証』（上海古籍出版社、一九八九年）「九華山歌」の条において、瞿蛻園氏は「觀禹錫此詩、以謝朓之於敬亭為比、而不言李、似不以九華山之名為始於李也。」（劉禹錫のこの『九華山歌』の詩をよく観てみると、謝朓の言う敬亭山と比較しているが、李白に対する言及はない。九華山の名称は李白に始まるとみなしていないかのよう

である。」と指摘している。

劉禹錫をはじめとする九華山に関わりのある唐の詩人たちは、果たして李白の九華山詩の存在を知っていたのであろうか。その問題を検討するに当たって、とりわけ重要と思われるのは、瞿蜕園氏の問題提起の契機にもなっている、劉禹錫の「九華山歌」である。以下に、この作品を見ていくことにしたい。

### 三、劉禹錫の「九華山歌」と李白詩との類似性

劉禹錫（字・夢得、七七二―八四二）は、周知のとおり、中唐を代表する詩人であり、また、韓愈、柳宗元、白居易、元稹等の文学者との交遊も広く知られている。「九華山歌」は、長慶四年（八二四年、五三歳）、和州刺史として任に赴く際、友人の崔群の招きにより、池州から宣州に至る途次、九華山を眺望して詠んだものである。この作品は、九華山を描いた作品としては、李白のそれと双璧をなすものとして、地志類等においても高い評価を得ている。例えば、鄭三俊「明崇禎修山志鄭序」に「九華経李青蓮目而名始定、経劉夢得目而奇秀特聞。」とあり、王公弼「明崇禎修山志王序」に「唐李青蓮更名九華、為秀出芙蓉之句。…唐以劉禹錫製為九華歌、而茲始著名寓内矣。」とあり、陳鳳桐「民国甲戌重新鑑訂九華山志序」に「太白秀出芙蓉、夢得宇宙尤物之句。」とある（いずれも前掲『九華山志』より引用。同書巻二「形勝」冒頭にも「謫仙詠秀、夢得驚奇。」の語がある）。以下に、その全文を挙げてみる。

九華山歌 并引 （九華山歌 引を并す）（下孝萱校訂『劉禹錫集』巻二六「楽府・上」）

九華山在池州青陽縣西南。九峰競秀、神采奇異。昔予仰太華、以為此外無奇、愛女兒、荆山、以為此外無秀。及今見九華、始悼前言之容易也。惜其地偏且遠、不為世所稱。故歌以大之。

〔九華山は池州青陽県の西南に在り。九峰秀を競い、神采奇異なり。昔、予、太華を仰ぎ、以て此の外に奇無しと為し、女几、荆山を愛し、以て此の外に秀づる無しと為せり。今、九華を見るに及び、始めて前言の容易なるを悼むなり。其の地の偏にして且つ遠く、世の称する所と為らざるを惜しむ。故に歌ひて以て之を大いにせんとす。〕

奇峰一見驚魂魄

奇峰 一見すれば魂魄を驚かし

意想洪鑪始開闢

意想す 洪鑪の始めて開闢せしときを

疑是九龍夭矯欲攀天

疑ふらくは是れ九龍の夭矯として天を攀ちんと欲して

忽逢霹靂一声化為石

忽として霹靂に逢ひ一声化して石と為るか

不然何至今

然らざれば 何ぞ今に至るまで

悠悠億万年

悠悠 億万年

氣勢不死如騰か云

氣勢死せず 騰か云するが如き

雲含幽兮月添冷

雲 幽を含み 月 冷を添え

日凝輝兮江漾影

日 輝を凝らし 江 影を漾ゆらす

結根不得要路津

根を結ぶは 要路の津を得ざるところ

迴秀長在無人境

迴秀として 長く無人の境に在り

軒皇封禪登云亭

軒皇 封禪 云亭に登り

大禹會計臨東溟

大禹 會計 東溟に臨む

乘櫟不來広楽絶

乘ま櫟、來たらず 広楽絶え

独与猿鳥愁青燐

独り猿鳥と青燐を愁ふ

君不見敬亭之山黄素漠

君見ずや 敬亭の山 黄として素漠

兀如断岸無稜角

兀として断岸の如く 稜角無し

宣城謝守一首詩

宣城の謝守 一首の詩

遂使名声齊五岳

遂に名声をして五岳に齊しからしむ

九華山 九華山

九華山 九華山

自是造化一尤物

自らは造化の一尤物

焉能籍甚乎人間

焉くんぞ能く 人間に籍甚せん

【通訳】 「九華山の歌 引をあわせる」

〔引〕九華山は池州青陽県の西南にあり、九峰秀麗さを競い合い、神秘的で優れている。昔、私は華山を仰ぎ、この山以上に奇なるものはないと思ひ、また女几山や荊山を愛し、これら以上に秀なるものはないと思ひ込んでいた。ところが今、九華山を見、はじめてこれらの発言が軽率であつたと悔いている。この山が僻遠の地にあつて、世に称賛されることのないことを遺憾に思ひ、ゆえに歌を作つてこの山を大いに広めようと思ふ。

九華山の奇峰の数々をひとたび見れば魂魄も驚かされ、この大宇宙の開闢の時をも想像してしまふ。山は、あたかも九龍が天に登らんとばかり勢いよく飛び上がり、たちまち霹靂に出会つて一声あげて石と化したかのごとき姿。そうとでも解釈しなければ、どうしてもはるか億万年もの間、この山の勢いが失われることもな

く、軽やかに舞い上がるかのように見えるのか。雲は奥床しさを含み、月は冷やかさを添え、日は輝きを凝集して、江は影を揺らめかす。この山が根をおろした土地は道も尋ね行くことのできぬ辺鄙な場所、しかも高い峰々にはばまれて、長く無人の境となっていた。云亭山は黄帝が封禪のために登って著名になり、会稽山も大禹王が東の海を望み見て著名になった。ところがここには、禹王が輿に乗って登って来ることもなく、黄帝が仙楽とともに降臨することもなかった。私は猿や鳥たちとともにこの青々とした山のことを悲しむだけである。あなたたちはご存じないか、あの宣城の敬亭山などは、荒涼索漠とした山で、断崖のように呆と立っているだけで、九華山のような切り断つた線の鋭さなどかけらもないのに、南朝・斉の大詩人謝朓が宣城太だった時に、「敬亭に遊ぶ」の一首を詠じただけで、一躍、五岳にも等しい名声を勝ち得たのを。九華山よ、九華山、君も君で、大自然の造り出した一つの「優れ物」なのだ。どうして世間に知られなくてもよいものか。

以上のように、表面的には、李白の名は、どこにも出て来ない。果たして、劉禹錫は、李白の九華山詩を読んでいなかったであろうか。結論から先に言えば、私見では、この作品は、李白の九華山詩を知ったの上での作であり、なおかつ李白に対する対抗意識が見え隠れしている作と考えたい。その根拠として次の三点が指摘できるように思われる。

まず第一に、「引」の書き方である。李白の「改九子山為九華山、聯句」の「序」と、極めて類似した発想で書かれている。李白の「序」の場合、①優れた山にもかかわらず、司馬遷「史記」にも紹介されず、古老の口にも上らず、文学の題材にもされていない無名の山であることをまず強調し、②次いで、改名し、「聯句」を作ることによって、これを将来に伝え、その名を普及させたいという旨を述べる、という形になっている。劉禹錫の「引」は、自己の直接体験に基づき、他の山との比較を通して九華山を賛美する、という形式になっているが、やはりその主旨は、①九華山は無名の山であり、

②歌を作ることよってその名を世に普及させたい、というもので、発想の上で、李白のそれと酷似している。さらには、李白が司馬遷を持ち出し、『史記』にも記述がないことを指摘したのに対して、劉禹錫は詩中に黄帝と禹王を出して、彼らも九華山に訪れたことがないことを指摘し嘆いている、という点も注意されてよいであろう。司馬遷・黄帝・禹王は、いずれもかなり過去の人物で、しかも中国各地を歴遊した人物というイメージがある。その意味でも、劉禹錫の発想は李白のそれに類似している。

第二に、「改九子山為九華山、聯句」の第七句目（李白担当部分）にある「青焚」の語を、劉禹錫も「九華山歌」の第十五句目に用いているということ。「青焚」の語は古くは漢の楊雄「羽獵賦」に見え、李善注には「光明貌。」と解されている。青く光り輝く様をいう疊韻の語である。唐詩においても、劉禹錫以前に張九齡、裴迪、杜甫等の詩にその用例は見られ、決して珍しい語彙ではないが、かといって頻用される語彙でもない。むろん劉禹錫のこの詩の場合、韻字の関係はこの語を思い付いたとも考えられるが、やはり、李白と同様の語を用いている以上、偶然の一致として片付けるわけにはいかないように思われる。

これに関連して、語彙的な一致ではないが、「改九子山為九華山、聯句」は、「妙有分二氣、靈山開九華」（やはり李白担当の部分）と、九華山創成の由来から説き起こしているが、劉禹錫も「意想洪鍾開闢」以下、いかにして九華山は創造されたか、という疑問から書き起こしている。その点、発想上の一致が見られる。

第三に、この「九華山歌」の内容あるいは作風が、李白の他の山岳詩に、発想上、極めて類似している、という点が指摘できるように思われる。確かに、李白の「改九子山為九華山、聯句」「望九華山贈青陽韋仲堪」二首に歌われる九華山と、劉禹錫の「九華山歌」に歌われる九華山では、その印象は、かなり異なっている。李白のそれは、「蓮の花に似ている」、「座りながらその松や雪を眺める」、「仙人の家がある」、「雲松に臥したい」等々、かなり静的であり、優雅な趣きに近い。それに対して、劉禹錫の描く九華山は、動的であり、奇異にして雄大、かつ「空想的」、「浪漫的」である。事実、この詩

を荻・朱帆著「劉禹錫及其作品」(時代文芸出版社、一九八五年)及び張秉成編「山水詩歌鑑賞辭典」(中国旅游出版社、一九八九年、高志忠執筆)では、「浪漫的的手法」によって描かれたものとし、また、余冠英主編「中国古代山水詩鑑賞辭典」(江蘇古籍出版社、一九八九年、臧維熙執筆)では「虚想を以て実景を写する手法」によって描かれたものとしている。

しかし、こういった評語は、いずれも、しばしば李白の作品、詩風に対して用いられる言葉である(現代中国では李白を「浪漫詩人」と評するのが一般的である)。つまり、ここで重要なことは、劉禹錫のこの「九華山歌」の手法が、極めて「李白的」であるということである。李白はおびただしい数の山岳に関する詩を残した詩人としても知られるが(大野実之助著「李太白研究」〔有明書房、改訂増補版、一九七一年〕所収「李白と山岳」を参照)、とりわけ樂府歌行体のそれは優れている。例えば、「蜀道難」「登高丘而望遠海」「山人勸酒」「西岳雲台歌送丹丘子」「同族弟金城尉叔卿燭照山水壁画歌」「鳴皋歌送岑徵君」「鳴皋歌奉饒從翁清暉五崖山居」「東山吟」「白雲歌送劉十六帰山」「当塗趙炎少府粉紈山水歌」「峨眉山月歌」「峨眉山月歌送蜀僧晏入中京」「夢遊天姥吟留別」「廬山謡寄盧侍御虚舟」等々、枚挙に暇がない。李白以前これほど大量に、樂府歌行の体をもつて山岳を描いた詩人は皆無といつてよい。しかも、その多くは、例えば「蜀道難」「夢遊天姥吟留別」(いずれも李白の代表作)のごとく、きわめて「空想的」「浪漫的」であり、動的であり雄大である。

劉禹錫が、あえてこの九華山を、歌行の体をもつて描こうとしたのは、李白のこういった作品の影響を受け、この九華山においてそれを応用し、李白に對抗しようとしたか、あるいは、李白がこの体をもつて九華山を描かなかったことを惜しんで、自ら筆を起したのではないか、という推論も成り立ちうるのではないだろうか。というのも、この「九華山歌」は、発想の上で、李白の、とりわけ「蜀道難」「夢遊天姥吟留別」の二作品に類似した点が、多々見られるのである。

例えば、「蜀道難」の「地崩山摧壯士死、然後天梯石棧相鉤連」は、蜀山が崩れ五壯士が生き埋めにされたことよって現在のように五嶺に分かれたという伝説(「華陽国志」等に見える故事)を、雄大な筆致で描いたものであるが、これは劉禹錫の「疑是九龍天矯欲攀天、忽逢霹靂一声化為石」と着想の点、筆致の点で類似する。また、「蜀道難」の「爾來



四万八千歳」と劉禹錫の「悠悠億万年」という表現、「蜀道難」の「猿猴欲度愁攀援」と劉禹錫の「独与猿鳥愁青荧」という表現等々、全体の作風のみならず、個々の表現や発想においても類似点は少なくない。

また、「夢遊天姥吟留別」と比較すると、類似点はさらに多い。例えば、李白は「天姥連天向天横、勢拔五岳掩赤城」と、五岳や天台山の赤城山といった名山を引き合いに出し、天姥山の山勢は、これらの山々よりも優れると賛美するが、これは、劉禹錫が敬亭山を引き合いに出し、それよりも九華山は優れている、とする発想と全く同じである。ちなみに、無名の山水を歌うに際して、他の著名な山水を引き合いに出して比較するというのは、李白の常套手段であり（拙論「李白における越地方の意義」李白の美意識の源流をめぐって）（『中国詩文論叢』九、一九九〇年）を参照のこと）、また、劉禹錫は「宣城謝守一首詩、遂使名声齐五岳」と歌うが、李白は、その敬亭山を謝朓の名とともに著名にした最大の功労者の一人である（拙論「李白における宣城の意義」『詩的古跡』の定着をめぐって）（『中国詩文論叢』十三、一九九四年）を参照のこと）。また、「夢遊天姥吟留別」の「列缺霹靂、岳巒崩摧」という表現は、霹靂によって山が崩れるというもので、これに対し劉禹錫の「疑是九龍天矯欲攀天、忽逢霹靂一声化為石」の場合、霹靂によって山ができる、というもの。李白の発想を転用したものと考えられなくもない。また、「夢遊天姥吟留別」の「忽魂悸以魄動、恍驚起而長嗟」と、劉禹錫の「奇峰一見驚魂魄」との類似。その他、「日」「月」「雲」「龍」「猿」等、一致する素材も多い。以上のごとく、劉禹錫の「九華山歌」は、李白の、とりわけ楽府歌行体の山岳詩を下敷きに書かれている可能性が強いように思われるのである。だとすれば、当然、劉禹錫が李白の九華山詩を読んでいた可能性も強くなる。李白の九華山詩を意識したからこそ、あえて李白の得意とする歌行体という様式を選択し、なおかつ「空想的」「浪漫的」な作風に仕上げたのではないだろうか。では、何故、李白について一言も触れていないのであるうか。考えられる理由としては、一つには、「九華山歌」の詩中において、李白的な表現をすることによって、すでに、読者に対して、十分李白を感じさせている。その上ことさらに李白の名を出せば、興を削ぐことにもなり、また、李白に対する対抗意識のみで書かれたものと誤解されてしまうという

おそれもある。また、この作品の主題からすれば、この九華山が無名の山であることを前提にしている以上、著名人・李白が歌っているということを語れば、すでに無名ではないではないかといった反論を予想して、また別の議論を展開しなくてはならなくなる。この作品は、あくまで九華山を著名にしようというのが主旨であるので、そういった繁雑な議論を避けようとしたのかも知れない。

総じて、劉禹錫は彼以前の唐詩人に対して、あまり言及をしないタイプの詩人であるように思われる。<sup>(4)</sup> 管見による限り、劉禹錫は、李白に対して何のコメントも残していない。いずれ稿を改めて詳述する必要があるが、私見によれば、こういった事実がある一方で、李白と劉禹錫は、詩風の上で、かなりの類似点がある。例えば、懐古詩を得意とし、歌行体に優れている、といった点などは、両者に共通する特徴である。

本節では、劉禹錫の「九華山歌」は、李白の九華山詩及び他の山岳詩の影響を受けているのではないか、ということについて論じてきたが、次節では、その大前提ともいえる問題、すなわち、劉禹錫も含めて、九華山に関わる詩人たちは、果たして李白の作品集を読んでいたのか、読んでいたとすれば、どのような経路で、それを入手していたのか、といった問題を論じてみたい。この点を探っていくことによつて、九華山詩壇、ひいては中晩唐詩壇に対しての、李白の影響力が見えてくるように思われるからである。

#### 四、李白詩の劉禹錫及び九華山詩人への伝播と影響

劉禹錫が、李白の別集を読んでいたとすれば、その機会は、柳宗元や韓愈（韓愈は李白・杜甫を高く評価している）等との交流以前にもありえたと考えられる。劉家は洛陽を根拠地としていたが、父の代、安史の乱の争乱を避け、江南の地に移り住み、劉禹錫はその地で生まれ、少年時代を過すことになる（二十代の始めまで在住）。この江南生活時代、劉

禹錫は、当地の二人の著名な詩僧、皎然（七二〇―八〇〇前後）・靈澈（七四六或いは七四九―八一六）の知遇を得ている。劉禹錫自身、後に「澈上人交文集記」（『劉禹錫集』卷一九）において、「初、〔靈澈〕上人在吳興（浙江省湖州、九華山のある池州及び宣州にも近い）、居何山。与昼公（皎然の字は昼）為侶。時予方以兩髦執筆硯、陪其吟詠。皆曰、孺子可教。」と、當時を懐かしんでいる。とりわけ皎然は、當時の江南文壇の大御所的存在であり、その江南文壇（特に湖州一帯）は、安史の乱からの大量の疎開組も吸収して、一大文学集団となっていた。しかも、安史の乱時の英雄たる顔真卿（七〇九―七八四）が、たまたま湖州刺史としてこの地に赴任してきた（七七三年から七七七年まで滞在）ことが、彼らの結束力を一層高めることになる。顔真卿は、彼らとともに多くの聯句を作ると同時に、皎然等を中心に「韻海鏡源」なる字書を編纂させるなど、活発にその結束力の強化を図っている。特に「韻海鏡源」の編纂には、顔真卿の呼び掛けに応じ、三十名以上の江南文士が集ったという（中には『茶経』の著者として知られる陸羽も参画している）から、顔真卿の名声もさることながら、當時のこの地における知識人の層の厚さは、注目に値しよう。

さて、この皎然であるが、彼は、李白の別集（『草堂集』）を、李白の死後、最も早く入手した人物の一人である可能性が極めて高い。このことについては、すでに賈晋華著『皎然年譜』（厦門大学出版社、一九九二年）が指摘している。同書では、宝応元年（七六二年）の条に「この年十一月、李白が宣州当塗に卒し、当塗の令・李陽冰は、その作品を『草堂集』十巻に編纂した。この集は非常に速く湖州に伝わったに違いない」とし、その理由として「皎然は大曆中、七言歌行に長じていることで著名であったが、その歌行の多くに李白を模倣しているところがあり、あるいは、『草堂集』が江南一帯に流伝したと関係があるかもしれない。」と指摘している。これに補足を加えるならば、かなり後になるが、皎然は文学理論書『詩式』を著しており、その中で李白の作品（『上雲楽』）を引用している。また、李陽冰（生没年未詳）は、李白の死を見とった人物で、李白の遺言に従って、この『草堂集』を編纂した人物であるが、彼が皎然・顔真卿とも交流があったことは、皎然の「同顔、使君真卿、峴山（湖州にある山）送李、法曹陽、冰、西上献書、時会有詔徵、赴京」（『全唐

詩』卷八一八)によっても確認できる。李陽冰と皎然・顔真卿の初対面がいつのことかは定かではないが、少なくとも、李陽冰は、湖州に至った時点において、この湖州を中心とした江南の一大文学集団に李白の詩文集を紹介したことは、ほぼ確実であろう。彼が、李白ほどの著名人の詩文集を紹介しなかったと仮定するほうが難しい。しかも、この『草堂集』の編纂は、李白自身に委嘱されたという荣誉ある作業であり、その成果をこの江南文学集団に紹介することは、李陽冰自身のよい宣伝材料にもなりうる。ちなみに、この皎然・顔真卿らの交遊をたどっていくと、劉長卿、劉全白、殷佐明、殷淑、韋冰、韋渠牟等々、李白が生前交遊していた人物も極めて多い。まさに、郁賢皓著『李白叢考』(陝西人民出版社、一九八二年)所収「李白暮年若干交遊考索」に、「李白が晩年に交わりを結んだ人物の多くは、顔真卿に何らかの關係をもっており、あるものは親戚、あるものは大暦年間に顔真卿と交遊したことがある」と指摘しているごとくである。

本論に関連して言うならば、この『草堂集』(現存しない)は、現存の李白集に比べ分量的に少なく、わずかに十巻であるが、通説による限り、九華山の二首は、李白の晩年に属する作であり、しかも本集は九華山に近い宣州当塗で編纂されているということもあって、収録されている可能性は極めて高いと考えられる。

また、若き日の劉禹錫が、皎然、あるいは、この、李白と関わりの深い江南の文学集団の何者かを通じて、李白の『草堂集』に目を通していた可能性も多いにある。前掲「澈上人交文集記」にも記されているように、劉禹錫は、皎然らと詩を吟じあい、激賞されるほど聡明な少年であった。皎然らが、彼に詩文の勉学の材料として、李白の集を紹介しなかったと考えるほうが、はるかに不自然であろう。

さて、次に問題となるのは、費冠卿及び、彼に続く、九華山に直結する晩唐の詩人たちと、李白との關係である。すでに第二節で述べたように、費冠卿の作品には、李白に直接触れたものは現存しないが、前述のように、「九華山化城寺記」冒頭に「九華山、古号九子山。」と、近年になって何らかの事情によって、山名が変更されたことを暗示するような発言

があり、李白の九華山改名を知っていた可能性は否定できない。また、当時、すでに改名は李白によるものであることが、少なくとも当地の間では常識となっていたため、李白の名をことさら挙げる必要はないと感じたがために、李白の名を記さなかったという可能性もある。興味深いことに、「九華四俊」と称された人物の一人、張贛に「費徵君旧居」（『全唐詩』卷七〇二）という詩があり、「浮世抛身外、棲蹤入九華。遺篇補樂府、旧籍隸仙家。…」と、費冠卿を評している。つまり、費冠卿が、樂府体の作品に優れ、仙道にも通じていたことをほのめかしている。樂府詩の名手、神仙思想の信奉者といえ、当時としても、すぐに思い浮かぶのは李白である。費冠卿が張贛の語るような人物であるならば、少なくとも李白の存在自体を知らなかったということは、まずありえないであろう。ちなみに、費冠卿と交遊のあった姚合の詩に「送潘伝秀才帰宣州」（『全唐詩』卷四九六）という作があり、その中に「李白墳三尺、嵯峨万古名。因君還故里、為我弔先生。…」という部分があり、当時、すでに李白の名は、その墓所の所在地（以下を参照）とともに、常識に属していたことがわかる（なお、姚合は劉禹錫とも交遊関係にあり、詩を唱和している。詳細は下孝萱『劉禹錫叢考』（巴蜀書舎、一九八八年）所収「交遊考」参照）。

次いで、九華山に関わりの深い晩唐の詩人たちを見てみると、その多くが、李白に対して、かなりの尊崇の念を抱いていることがわかる。

例えば、九華山人と自ら号していた杜荀鶴（日本でも彼の「夏日題悟空上人院」の「安禪不必須山水、滅得心中心火自涼」の句はよく知られている）は、宣州当塗県青山の李白墓を訪れた際、「経青山弔李翰林」（『全唐詩』卷六九二）と題する詩を残し、その中で、「何為先生死、先生道日新。青山明月夜、千古一詩人。…」と、李白を高く評価し、また、「哭陳陶」（『全唐詩』卷六九二）においては、陳陶の墓所を、「采石江辺弔翰林」と、李白の捉月伝承の地になぞらえている（采石磯は、李白が長江に舟を浮かべ月を掬おうとして溺れ死んだと伝えられる地。現在の安徽省馬鞍山市にある）。

また、「九華四俊」「咸通十哲」の一人に数えられる許棠も、青山を訪れ、「雲藏李白墓、苔暗謝公詩。」と、「宿青山館」

〔『全唐詩』卷六〇三〕詩において歌っている。そもそも、この青山は、李白の愛した謝朓ゆかりの地であり、李白も、それゆえこの地を自らの墓地にと遺言したわけであるが、それにしても、許棻が、対句によって、南朝を代表する詩人と李白を同列に並べているという事実は、注目に値しよう。謝朓は、文学史的な地位をすでに確立している詩人であり（特に李白、及びそれに継ぐ大暦の詩人たちによって高く評価された）、これに対して、李白は当時から名声のあつた詩人とはいへ、許棻と同じ唐代の詩人である。つまり、許棻自身の心中に、李白は、同じ唐代の詩人であっても、すでに文学史上、評価の定まつた謝朓と同列に扱ってしかるべき地位を獲得している詩人であるという認識があつたと考えられるわけである。さらには、許棻がこの宣州に赴くに際して、友人の林寛（生没年未詳）が、「送許棻先輩歸宣州」〔『全唐詩』卷六〇六〕という詩の中で、「鶯啼謝守壘、苔老謫仙碑。詩道喪來久、東歸為弔之。」と述べ、やはり謝朓と李白を対にしている。許棻のみならず、当時の詩壇において、李白は謝朓と同列に扱つてよいという共通認識が、すでに成立していたことが窺われる。

九華山ゆかりの人物としては、さらには殷文圭も、李白の墓所を訪れて、「經李翰林墓」〔『全唐詩』卷七〇七〕という作を残している。やはり「詩中日月酒中仙、平地雄飛上九天」と、高い評価を与えている。その他、張喬の「弔前水部賈員外」〔『全唐詩』卷六三八〕にも「李白墳前踏、溪僧送入林」といった句がある。

現存の資料により限り、以上に挙げた例が、九華山に直接関連のある詩人たちの李白言及例のほぼ全てである。彼らの現存作品数自体が非常に少なく、その大半は散逸してしまったものと考えられる。にもかかわらず、これだけの李白言及例がある以上、おそらく李白は、さらに多くの作品の中で触れられていたものと推察される。さらに言うならば、九華山関係の詩人たちだけにとどまらず、総じて、この時期の詩人たち全般の李白評価は、かなり高かつたものと思われる。例えば、九華山とは直接には縁がなかったものの、この時期を代表する詩人である皮日休や陸龜蒙の作品にも李白に言及している作例がある。

確かに、前掲の杜荀鶴「経青山弔李翰林」、許棠「宿青山館」、殷文圭「経李翰林墓」も、李白の墓所を訪れての作であり、墓前においてその故人を高く評価するのは当然であろう。また、その墓所のある宣州青山は、九華山と程遠くない距離にある。彼らが李白の墓に詣でることも比較的容易であったにちがいない。しかし、本稿の主旨に即して言うならば、このように、李白墓を含めて「李白詩跡」の宝庫である宣州・池州に身を置いていた彼らは、好むと好まざるとにかかわらず、常に李白を意識せざるをえない状況に置かれていた、という事実は動かせないであろう。しかも、この地は、かつて、あの李白『草堂集』をいち早く入手したと考えられる、皎然・顔真卿らの文学集団が活発に文学活動を行なっていた湖州のすぐ側に位置している。そのような状況下にあつて、彼らが、九華山隠棲中に、李白の「改九子山為九華山、聯句」『望九華山贈青陽韋仲堪』の存在を知る機会もなく過ごしたという可能性は、極めて低いでであろうと判断される。だとすれば、かりに「九華山」なる名称が、李白以前から存在していたとしても、李白が「九子山を改め九華山に為」さんとした行為自体は、彼らの知識の中にあつては常識の範囲内に属していたものと考えられる。さらに言えば、彼らによつて、この九華山は、完全に「詩跡」としての地位を獲得し、そして、それと同時に、その九華山にいち早く着目した詩人として、李白への称賛の声も高まり、北宋以降の、李白と九華山との強固な結びつきへと発展していったものと考えられるのである。

##### 五、結語と命名という行為、及び「聯句」という表現手段について

以上、本稿では、①「九華山」の名称は、北宋初期の地志等において、すでに公式に認められていたこと（同時に、それらの書が李白を命名者であると並記していること）、②唐代においても、無名氏「九華山録」、晚唐初期の孟渾の「発蕙風館遇陰不見九華山有作」等、李白と九華山とを関連づけて述べている詩文が若干見られること、③劉禹錫の「九華山歌」





しかも、この九華山改名に際しては、その立会人とも言うべき人物を揃えた上で行なっている。「改九子山為九華山、聯句」に見える人物は、夏侯迥、高霽、韋權輿の三人であるが、おそらく彼らは、少なくともこの地域において何らかの影響力を持つ人物であったに違いない。まず夏侯迥は、朱金城・瞿蛻園校注『李白集校注』（上海古籍出版社、一九八〇年）によれば、「按、当是宣宗時宰相夏侯孜之先代、惟新書世系表不載、迥疑当作迥。」とあり、これが事実だとすれば、後に宰相を出すほどの家柄であることになる。また、韋權輿については、詹鍇著『李白詩文繫年』（人民文学出版社、一九五八年）によれば、「望九華山贈青陽韋仲堪」の韋仲堪のことで（つまりどちらかが名か字）、蓋し、青陽県令（県の長官）であつた者であろうとしている。かりに、同一人物でなかつたとしても、「望九華山贈青陽韋仲堪」詩の「青陽韋仲堪」という書き方からして、韋仲堪なる人物が県令である可能性は高く（ちなみに、『宋本』では「韋青陽」となっており、だとすれば、ほぼ間違いなく県令である）、その人物に贈つた詩において、すでに「九華山」の名称で語っている以上、地元の県令レベルの改名承認を、この段階で得ていることになる。

さらに注目すべき点は、この「聯句」という形式である。「聯句」の發生については、すでに多くの指摘があるので、ここでは触れないが、少なくとも唐代に入つてからは、しばらくはほとんど行なわれておらず、李白らのこの「聯句」以前では、中宗の宮廷内で行なわれた「十月誕辰内殿宴群臣效柏梁体」（『全唐詩』卷二）を見る程度にすぎない。『全唐詩』も、卷七八八以下の「聯句」の条の筆頭に、この「改九子山為九華山、聯句」を挙げ、以下、ほぼ年代順に杜甫ら、顔真卿ら、白居易ら、韓愈らの聯句を挙げている。つまり宮中行事等を除けば、この「改九子山為九華山、聯句」は、現存する唐代最古の聯句ということになる（ちなみに李白集においてもこの一首のみ）。ここに、李白の「九華山詩跡化」への情熱が見て取れるのではないだろうか。「聯句」という、当時としては、いささか奇異な、あるいは時代錯誤的な表現手法をとることによつて、単にその場にいる同席者どうしの結束力、連帯感を強めるだけでなく、この作品自体を読者に強烈に印象付けることによつて、この九華山の名を後世に伝えようとしたのではないだろうか。

〔注〕

- (1) 「詩跡」の定義等に関しては、拙論「李白における武漢の意義」『詩的古跡』の生成をめぐって』（『中国詩文論叢』十一、一九九二年）及び「李白における宣城の意義」『詩的古跡』の定着をめぐって』（『中国詩文論叢』十三、一九九四年）及び「李白と『詩跡』」『中国詩の歌枕』（大修館書店『月刊しにか』一九九五年六月号）を参照されたい。
- (2) 詹鏐著『李白詩文繫年』（人民文学出版社、一九五八年）は天宝十三載、安旗主編『李白全集編年注釈』（巴蜀書社、一九九〇年）は天宝十四載とする。
- (3) 以下、詩人の生没年については、周勳初主編『唐詩大辞典』（江蘇古籍出版社、一九九〇年）に従う。
- (4) ただし、「唐故尚書主客員外郎盧公集記」に王維、崔顥の名が見え、「董氏武陵集」に杜甫の名が見られる、といった若干の例外はある。しかしこれらの場合も、特に劉禹錫が、彼らに対して何らかの評価を加えているわけではなく、当時の著名詩人として取り上げられているにすぎない。
- (5) 注(1)所掲の論文を参照のこと。